

# 朝顔

## 渋谷栄一訳

### 第一章 朝顔姫君の物語 昔の恋の再燃

「第一段 九月、故桃園式部卿宮邸を訪問」

齋院は、御服喪のために退下なさったのである。大臣、例によって、いったん思い初めたこと、諦めないご性癖で、お見舞いなどたいそう頻繁に差し上げなさる。宮は、かつて困ったことをお思い出しになると、お返事も気を許して差し上げなさらない。たいそう残念だとお思い続けていらつしやる。

九月になって、桃園宮にお移りになったのを聞いて、女五の宮がそこいらつしやるので、その方のお見舞にかこつけて参上なさる。故院が、この内親王方を特別に大切にお思い申し上げていらつしやるので、今でも親しくそれからそれへと交際なさっていらつしやるようである。同じ寝殿の西と東にお住みになっていらつしやるのであつた。早くも荒廃してしまつた心地がして、しみじみとの寂しげな感じである。

宮が、ご対面なさつて、お話を申し上げなさる。たいそうお年を召したご様子、とかく咳をしがちでいらつしやる。姉上におあたりになるが、故大殿の宮は、申し分なく若々しいご様子なのに、それにひきかえ、お声もつやがなく、こつこつとした感じでいらつしやるのは、そうした人柄なのである。

「院の上、お崩れあそばして後、いろいろと心細く思われまして、年をとるにつれて、ひどく涙がちに過ごしてきましたが、この宮までがこのように先立たれましたので、ますます生きていますのか死んでいるのか分からないような状態で、この世に生き永らえておりましたところ、このようにお見

舞いに立ち寄りくださつたので、物思いも忘れられそんな気がします」  
とお申し上げになる。

「恐れ多くもお年を召されたものだ」と思うが、かしこまつて、

「院がお崩れあそばしてからは、さまざまなことにつけて、在世当時のようではございませんで、身におぼえのない罪に当たりまして、見知らない世界に流浪しましたが、偶然にも、朝廷からお召しくださいましてからは、また忙しく暇もない状態で、ここ数年は、参上して昔のお話だけでも申し上げたり承つたりできなかつたのを、ずつと気にかけて続けてまいりました」  
などと申し上げなさると、

「とてもとても驚くほどの、どれをとつてみても定めぬ世の中を、同じような状態で過ごしてまいりました寿命の長いことの恨めしく思われることが多くございますが、こうして、政界にご復帰なさつたお喜びを、あの時代を拝見したままで死んでしまつたら、どんなにか残念であつたであろうかと思われました」  
と、声をお震わせになつて、

「まことに美しくご成人なさいましたね。子どもでいらつしやつたころに、初めてお目にかかつた時、真実にこんなにも美しい人がお生まれになつたと驚かずにはいられませんでしたが、時々お目にかかるたびに、不吉なまでに思われました。今上の帝が、とてもよく似ていらつしやるので、人々が申しますが、いくら何でも見劣りあそばすだろつと、推察いたします」  
と、くどくどと申し上げなさるので、

「ことさらに面と向かつて人は寝めないものを」と、おかしくお思いになる。  
「田舎者になつて、ひどく元気をなくしております年月の後は、すっかり衰えてしまいましたものを。今上の御容貌は、昔の世にも並ぶ方がいないのではいかと、世に類ないお方と拝見しております。変なご推察です」  
と申し上げなさる。

「時々お目にかかれたら、長い寿命がますます延びそうでございます。今日は老いも忘れ、憂き世の嘆きもみな消えてしまつた感じがします」  
と言つては、またお泣きになる。

「三の宮が羨ましく、しかるべきご縁ができて、親しくお目にかかることがおできになれるのを、羨ましく思います。こちらのお亡くなりになつた方

も、そのように言つて後悔なさる折々がありました」

とおっしゃるので、少し耳がおとまりになる。

「そういふふうにも、親しくお付き合ひをさせていただけたならば、今も嬉しいことでもございましたように。すっかり見限りなさいまして」

と、恨めしそうに様子ぶつて申し上げなさる。

### 「第二段 朝顔姫君と対話」

あちらのお前の方にお目をやりなされると、うら枯れた前栽の風情も格別に見渡されて、のんびりと物思いに耽つていらつしやるらしいご様子、ご器量も、たいそうお目にかかりたくしむじみと思われて、我慢することがおできになれず、

「このようにお伺ひした機会を逃しては、無愛想になりますから、あちらへのお見舞いも申し上げなくてはなりませんでした」

と言つて、そのまま簀子からお渡りになる。

暗くなつてきた時分であるが、鈍色の御簾に、黒い御几帳の透き影がしみじみと見え、追い風が優美に吹き通して、風情は申し分ない。簀子では不都合なので、南の廂の間にお入れ申し上げる。

宣言が、対面して、「ご挨拶はお伝え申し上げます」。

「今さら、若者扱ひの感じがします御簾の前ですね。神さびるほど古い年月の年功も数えられますので、今は御簾の内への出入りもお許しいただけるものと期待しておりましたが」

と言つて、物足りなくお思いでいらつしやる。

「今までのことはみな夢と思ひ、今、夢から覚めてはかない気がするのかわつつきりと分別しかねておりますが、年功などは、静かに考えさせていただきましよう」

とお答え申し上げさせなされた。「なるほど無常な世である」と、ちよつとしたことにつけても自然とお思い続けられる。

「誰にも知られず神の許しを待つていた間に、長年つらい世を過してきてきたことよ、今は、どのような戒めにか、かこつけなさろうとするのでしよう。総じて、世の中に厄介なことまでがございました後、いろいろとつらい思

いをするところがございました。せめてその一部なりとせ」

と、たつて申し上げなさる、そのお心づかいなども、昔よりもう一段と優美さまでが増していらつしやうした。その一方で、とてもたいそうお年も召していらつしやるが、「ご身分には相応しくないようである」。

「一通りのお見舞いの挨拶をするだけでも、誓つたことに背くと神が戒めるでしよう」

とあるのだ、

「ああ、情けない。あの当時の罪は、みな科戸の風にまかせて吹き払つてしまつたのに」

とおっしゃる魅力も、この上ない。

「その罪を払う襖を、神は、どのようにお聞き届けたのでございましょうか」などと、ちよつとしたことを申し上げるのも、まじめな話、とても気が気でない。結婚しようとなさらないご態度は、年月とともに強く、ますます引つ込み思案になりなされて、お返事もなさらないのを、困つたことと押するようである。

「好色めいたふうになつてしまつて」

などと、深く嘆息してお立ちになる。

「年をとると、臆面もなくなるものです。世に類ないやつれた姿を、この今は、と御覧くださいとだけでも申し上げまするほどにも、扱つて下さつたでしようか」

と言つて、お出になつた後は、うるさいまでに、例によつてお噂申し上げていた。

ただでさえも、空は風情があるころなので、木の葉の散る音につけても過ぎ去つた過去のしみじみとした情感が甦つてきて、その当時の、嬉しかったり悲しかったりにつけ、深くお見えになつたお気持ちのほどを、お思い出し申し上げなさる。

### 「第三段 帰邸後に和歌を贈答しあう」

お気持ちの収まらないままお帰りになつたので、以前にもまして、夜も眠れずにお思い続けになる。早く御格子を上げさせなされて、朝霧を眺め

なさる。枯れたいくつもの花の中に、朝顔があちこちにはいまつわつて、あるかなきかに花をつけて、色艶も格別に変わつてゐるのを、折らせなさつてお贈りになる。

「きつぱりとしたおあしらいに、体裁の悪い感じがいたしましたして、後ろ姿もますますどのように御覧になつたかと、悔しくて。けれども、昔拝見したあなたはどうしても忘れられません。その朝顔の花は盛りを過ぎてしまつたのでしようか。長年思い続けてきた苦勞も、氣の毒だとぐらいには、いくな何でも、ご理解いただけれるだろうかと、一方では期待しつゝ」

などと申し上げなさつた。穏やかなお手紙の風情なので、返事をせずに氣をもませるのも、心ないことか」とお思いになつて、女房たちも御硯を調べて、お勧め申し上げるので、

「秋は終わつて霧の立ち込める垣根にしぼんで、今にも枯れそうな朝顔の花のようなわたしです。似つかわしいお諭えにつけても、涙がこぼれて」

とばかりあるのは、何のおもしろいこともないが、どういふわけか、手放しがたく御覧になつていらつしやるようである。青鈍色の紙に、柔らかな墨跡は、たいそう趣深く見えるようだ。ご身分、筆跡などによつてとりつくるわかれて、その時は何の難もないことも、いざもつともらしく伝えるとなると、事実を誤り伝えることがあるようなので、ここは勝手にとりつくるつて書くようなので、変なところも多くなつてしまつた。

昔に歸つて、今さら若々しい恋文書きなども似つかわしくないこと、とお思いになるが、やはりこのように昔から離れぬでもないご様子でありながら、不本意なままに過ぎてしまつたことを思いながら、とてもお諦めになることができず、若返つて、真剣になつて文を差し上げなさる。

「第四段 源氏、執拗に朝顔姫君を恋う」

東の対に独り離れていらつしやつて、言言を呼び寄せ呼び寄せてはご相談なさる。宮に伺候する女房たちで、それほどでない身分の男にさえ、すぐになびいてしまふような者は、間違ひも起こしかねないほど、お褒め申し上げるが、宮は、その昔でさえきつぱりとお考えにもならなかつたのに、今となつては、昔以上に、どちらも色恋に相応しくないお年、ご身分であ

るので、ちよつとした木や草につけてのお返事などの、折々の興趣を見過ぎずにいるのも、軽率だと、受け取られようか」などと、人の噂を憚り憚りなさつては、心をうちとけなさるご様子もないので、昔のままと同じようなお氣持ちを、世間の女性とは違つて、珍しくまた妬ましくもお思い申し上げなさる。

世間に噂が漏れ聞こえて、

「前齋院を、熱心にお便りを差し上げなさるので、女五の宮なども結構にお思ひのようです。似つかわしくなくもないお間柄でしょう」

などと言つていたのを、対の上は伝え聞きなさつて、暫くの間は、いくら何でも、もしそついうことがあつたとしたら、お隠しになることはあるまい」

とお思ひになつていらつしやつたが、さつそく氣をつけて御覧になると、お振る舞いなども、いつもと違つて魂が抜け出たようなも情けなくて、

「真剣になつて思いつめていらつしやるらしいことを、素知らぬ顔で冗談のように言いくるめなさつたのだわと、同じ皇族の血筋でいらつしやるが、声望も格別で、昔から重々しい方として聞こえていらつしやつた方なので、お心などが移つてしまつたら、みつともないことになるわ。長年のご寵愛などは、わたしに立ち並ぶ者もなく、ずっと今まできたのに、今さら他人に負かされようとは」

などと、人知れず嘆かずにはいらつしやれない。

「すっかりお見限りになることはないとしても、幼少のころから親しんでこられた長年の情愛は、軽々しいお扱いになるのだらう」

など、あれこれと思ひ乱れなさるが、それほどでもないことなら、嫉妬などもご愛嬌に申し上げなさるが、心底つらいとお思ひなので、顔色にもお出しにならない。

端近くにお思ひに耽りがちで、宮中にお泊まりになることが多くなり、仕事と言へば、お手紙をお書きになることで、

「なるほど、世間の噂は嘘ではないようだ。せめて、ほんの一言おつしやつてくださればよいのに」

と、いやなお方だとばかりお思ひ申し上げていらつしやる。

「第一段 朝顔姫君訪問の道中」

夕方、神事なども停止となつて物寂しいので、することも無い思いに耐えかねて、五の宮にいつものお伺いをなさる。雪がちよつとちらついで風情ある黄昏時に、優しい感じに着馴れたお召し物に、ますます香をたきしめなまつて、念入りにおめかしして一日をお過ごしになったので、ますますなびきやすい人はどんなにかと見えた。それでも、お出かけのご挨拶は「挨拶として、申し上げなさる。」

「女五の宮が病気でいらつしやるというのを、お見舞い申し上げようと思ひまして」

と言つて、軽く膝をおつきになるが、振り向きもなさらず、若君をあやして、さりげなくいらつしやる横顔が、ただならぬ様子なので、

「不思議と、」機嫌の悪くなつたこのごろですね。罪もありませんね。塩焼き衣のように、あまりなれなれしくなつて、珍しくなくお思いかと思つて、家を空けていましたが、またどのようにお考えになつてか」

などと申し上げなさる。」

「馴じんで行くのは、おつしやるのとおり、いやなことが多いものですね」

とだけ言つて、顔をそむけて臥せつていらつしやるのは、そのまま見捨ててお出かけになるのも、気も進まないが、宮にお手紙を差し上げてしまつていたので、お出かけになつた。

「このよつな」ともある夫婦仲だつたのに、安心しきつて過ごしてきたことだわ」

とお思い続けて、臥せつていらつしやる。鈍色めいたお召し物であるが、色合いが重なつて、かえつて好ましく見えて、雪の光にたいそう優美なお姿を御覧になつて、

「ほんとうに心がますます離れて行つてしまわれたならば」

と、堪えきれないお気持ちになる。

御前駆なども内々の人ばかりで、

「宮中以外の外出は、億劫になつてしまつたよ。桃園宮が心細い様子でいらつ

しやるのも、式部卿宮に長年お任せ申し上げていたが、これからは頼むなどとおつしやるのも、もつともなこと、お気の毒なので、」

などと、人々にもしいておつしやるが、

「さあどんなものでしょう。ご好心が変わらないのは、惜しい玉の瑕のようです。」

「よからぬ事がきつと起るでしよう。」

などと、呟き合つていた。

「第二段 宮邸に到着して門に入る」

宮邸では、北面にある人が多く出入りする門は、お入りになるのも軽率なようなので、西にあるのが重々しい正門なので、供人を入れさせなまつて、宮の御方にご案内を乞つと、「今日はまさかお越しになるまい」とお思ひでいたので、驚いて門を開けさせなさる。

御門番が、寒そつな様子で、あわてて出てきて、すぐには開けられない。この人以外の男性はいないのである。「このごろと引いて、

錠がひどく錆びつてしまつていたので、開かない」

と困つているのを、しみじみとお聞きになる。

「昨日今日のこととお思ひになつていたうちに、はや二年も昔になつてしまつた世の中だ。このような世を見ながら、飯の宿を捨てることもできず、木や草の花にも心をときめかせるとは」と、つくづくと感じられる。口ずさみに、

「いつの間にかこの邸は蓬がおい茂り、雪に埋もれたふる里となつてしまつたのだらう」

やや暫くして、無理やり引つ張り開けて、お入りになる。

「第三段 宮邸で源典侍と出会う」

宮の御方に、例によつて、お話申し上げなさると、昔の事をとりとめもなく話し出しはじめて、はてもなくお続きになるが、「ご関心もなく、眠い

が、宮もあくびをなさって、

「宵のうちから眠くなつていましたので、終いまでお話もできません」

とおっしゃる間もなく、鼾とかいう、聞き知らない音がするので、これさいわいとお立ちになるうとすると、またたいそう年寄くさい咳払いをして、近寄つてまいる者がいる。

「恐れながら、ご存じでいらつしやるうと心頼みにしておりましたのに、生きてゐる者の一人としてお認めくださらないので。院の上は、祖母殿と仰せになつてお笑いあそばしました」

などと、名乗り出したので、お思い出しになつた。

源典侍と言つた人は、尼になつて、この宮のお弟子として勤行してゐると聞いていたが、今まで生きていようとはお確かめ知りにならなかつたので、あきれぬ思いをなさつた。

「その当時のことは、みな昔話になつてゆきますが、遠い昔を思い出すと、心細くなりますが、なつかしく嬉しいお声ですね。親がいなくて臥せつてゐる旅人と思つて、お世話してください」

と言つて、物に寄りかかつていらつしやるご様子に、ますます昔のことを思い出して、相変わらぬまめかしいしなをつくつて、たいそうすぼんだ口の恰好、想像される声だが、それでもやはり、甘つたるい言い方で戯れかかろうと今も思つてゐる。

「言い続けてきたうちに」などとお申し上げかけてくるのは、こちらの顔の赤くなる思いがする。「今急に老人になつたような物言いだ」などと苦笑されるが、また一方で、これも哀れである。

「その女盛りのころに、寵愛を競い合いなかつた女御、更衣、ある方はお亡くなりになり、またある方は見るかげもなく、はかないこの世に落ちぶれていらつしやる方もあるようだ。入道の宮などの御寿命の短さよ。あきれぬばかりの世の中の無常に、年からいつても余命残り少なそうで、心構えなども、頼りなさそうに見えた人が、生き残つて、静かに勤行をして過ごしてゐるのは、やはりすべて定めぬ世のありさまなのだ」

とお思いになると、何となくしみじみとしたご様子を、心のときめくことかと誤解して、はしゃぐ。

「何年たつてもあなたとの縁が忘れられません 親の親とかおっしゃつた

一言がございますもの」

とお上げると、気味が悪くて、

「来世に生まれ変わった後まで待つて見てください この世で子が親を忘れる例があるかどうかと 頼もしいご縁ですね。いずれゆつくりと、お話し申し上げましよう」

とおっしゃつて、お立ちになつた。

「第四段 朝顔姫君と和歌を詠み交わす」

西面では御格子を下ろしてしたが、お嫌い申してゐるよう思われるのもどつかと、一間、二間は下ろしてない。月が顔を出して、うつすらと積もつた雪の光に映えて、かえつて趣のある夜の様子である。

「さきほどの老いらくの懸想ぶりも、似つかわしくないものの例とか聞いた」とお思い出されなつて、おかしくなつた。今宵は、たいそう真剣にお話なさつて、せめて一言、憎いなどでも、人伝てではなく直におっしゃつていただければ、思いあきらめるきつかけにもしましよう」

と、身を入れて強くお訴えになるが、

「昔、自分も相手も若くて、過ちが許されたころでさえ、亡き父宮などが好感を持つていらつしやつたのを、やはりとんでもなく気がひけることだとお思い申して終つたのに、晩年になり、盛りも過ぎ、似つかわしくない今頃になつて、その一言をお聞かせするのも気恥ずかしいことだらう」

とお思いになつて、まづたく動じようとしなないお気持ちなので、あきれるほどに、つらい」とお思い申し上げなさる。

そうかといつて、不体裁に突き放してというのではない取次ぎのお返事などが、かえつてじれることである。夜もたいそう更けてゆくにつれ、風の具合が、激しくなつて、ほんとうにも心細く思われるので、体裁よいところで、お拭いになつて、

「昔のつれない仕打ちに懲りもしないわたしの心までが、あなたがつらく思ふ心に加わつてつらく思われるのです 自然とどうしようもございませぬ」と口の上るままにおっしゃると、

「ほんとうに」

「見ていて気が気でありませんわ」

と、女房たちは、例によって、申し上げる。

「今さらどうして気持ちを変えたりしましょう 他人ではそのようなことがあると聞きました心変わりを 昔と変わることは、今もできません」  
などとお答え申し上げなされた。

「第五段 朝顔姫君、源氏の求愛を拒む」

何とも言いようがなくて、とても真剣に恨み言を申し上げなされてお帰りになるのも、たいそう若々しい感じがなされるので、

「ひどく」世の中のもの笑いになってしまふような様子、お漏らしなさるなよ。きつときつと。いさら川などと言つのも馴れ馴れしいですね」

と言つて、しきりにひそひそ話しかけていらつしやるが、何のお話であるうか。女房たちも、

「何とも、もつたいない。どうしてむやみにつれないお仕打ちをなさるのでしょ」

「軽々しく無体なこととお見えにならない態度なのに。お気の毒な」と言つ。

なるほど、君のお人柄の、素晴らしいのも、慕わしいのも、お分かりにならないのではないが、

「ものの情理をわきまえた人のように見ていただいたとしても、世間一般の人がお褒め申すのとひとしなみに思われるだろう。また一方では、至らぬ心のほどもきつとお見通しになるに違ひなく、気のひけるほど立派なお方だから」とお思いになると、親しそうな気持ちをお見せしても、何にもならない。さし障りのないお返事などは、引き続き、御無沙汰にならないくらいに差し上げなされて、人を介してお返事、失礼のないようにしていただく。長年、仏事に無縁であつた罪が消えるように仏道の勤行をしよう」とは決意はなさるが、急にこのようない関係、断ち切つたようにするのも、かえつて思わせぶりに見えもし聞こえもして、人が噂しはしまいか」と、世間の人の口さがないのをご存知なので、一方では、伺候する女房たちにも気をお許しにならず、たいそう用心なさりながら、だんだんご勤行一

途になつて行かれる。

「ご兄弟の君達は多数いらつしやるが、同腹ではないので、まったく疎遠で、宮邸の中がたいそうさびれて行くにつれて、あのような立派な方が、熱心にご求愛なさるので、一同そろつて、お味方申すのも、誰の思いも同じと見える。」

第三章 紫の君の物語 冬の雪の夜の孤影

「第一段 紫の君、嫉妬す」

大臣は、やみくもにご執心というわけではないが、つれない態度が腹立たしいので、負けて終わるのも悔しく、なるほどそれは、確かにご自身の人品や、世の評判は格別で、申し分なく、物事の道理を深くわきまえ、世間の人々の、それぞれの生き方の違いも広くお知りになつて、昔よりも経験を多く積んでいらつしやるので、今さらのお浮気事も、一方では世間の非難をお分りになりながら、

「このまま空しく引き下がつては、ますます物笑いとなるであろう。どうしたらよいものか」

と、お心が騒いで、一条院にお帰りにならない夜がお続きになるのを、女君は、冗談でなく恋しいとばかりお思いになる。我慢していらつしやるが、どうして涙がこぼれる時がないであろうか。

「不思議にいつもと違つたご様子が、理解できませんね」

と言つて、お髪をかき撫でながら、おいたわしいと思つていらつしやる様子も、絵に描きたいようなお人柄である。

「宮がお亡くなりになつて後、主上がともお寂しそつにばかりしていらつしやるのも、おいたわしく拝見していますし、太政大臣もいらつしやるので、政治を見讓る人がいない忙しさです。このごろの家へ帰らないことを、今までになかつたことのようにお恨みになるのも、もつともなこと、お気の毒ですが、今はいくら何でも、安心にお思いなさい。おとなのようにおなりになつたようですが、まだ深いお考えもなく、わたしの心も

まだお分りにならないようでいらつしやるのが、かわいらしい」

などと言つて、涙でもつれてゐる額髪、おつくるいになるが、ますます横を向いて何とも申し上げなさらぬ。

「とてもひどく子どもっぽくしていらつしやるのは、誰がおしつけ申したことでしょつ」

と言つて、無常の世に、こつまで隔てられるのもつまらないことだ」と、一方では物思いに耽つていらつしやる。

「齋院にとりよめない文を差し上げたのを、もしや誤解なさつてゐることはありませんか。それは、大変な見当違いのことですよ。自然とお分かりになるでしょう。昔からまつたくよそよそしいお気持ちなので、もの寂しい時々、恋文めいたものを差し上げて困らせたと、あちらも所在なくお過ごしのところなので、まれに返事などなさるが、本気ではないので、こついうことですよ、不平をこぼさなければならぬことですよ。不安なことは何もあるまいと、お思い直しなさい」

「第二段 夜の庭の雪まらばし」

雪がたいそう降り積もつた上に、今もちらちらと降つて、松と竹との違いがおもしろく見える夕暮に、君のご容貌も一段と光り輝いて見える。

「季節折々につけても、人が心を惹かれるらしい花や紅葉の盛りよりも、冬の夜の冴えた月に、雪の光が照り映えた空こそ、妙に、色のない世界ですが、身に染みて感じられ、この世の外のことまで思いやられて、おもしろさもあわれさも、尽くされる季節です。興醒めな例として言つた人の考えの浅いことよ」

と言つて、御簾を巻き上げさせなさる。

月は隈なく照らして、一色に見渡される中に、萎れた前栽の影も痛々しく、遣水もひどく咽び泣くように流れて、池の氷もぞつとするほど身に染みる感じで、童女を下ろして、雪まらばしをおさせになる。

かわいらしげな姿、お髪の恰好が、月の光に映えて、大柄の物馴れた童女が、色とりどりの袂をしどけなく着て、袴の帯もゆつたりした寢間着姿、

優美なうえに、袂の裾より長い髪の末が、白い雪を背景にしていつそう引き立つてゐるのは、たいそう鮮明な感じである。

小さい童女は、子どもらしく喜んで走りまわつて、扇なども落として、氣を許してゐるのがかわいらしい。

たいそう大きく丸めようと、欲張るが、転がすことができなくなつて困つてゐるようである。またある童女たちは、東の縁先に出ていて、もどかしげに笑つてゐる。

「第三段 源氏、往古の女性を語る」

「先年、中宮の御前に雪の山をお作りになつたのは、世間で昔からよく行われてきたことですが、やはり珍しい趣向を凝らしてちよつとした遊び事もなさつたものでしたなあ。どのような折々につけても、残念でたまない思ひですね。

とても隔てを置いていらして、詳しいご様子は拝したことはございませんでしたが、宮中生活の中で、心安い相談相手としては、お考えくださいました。

「ご信頼申し上げて、あれこれ何か事のある時には、どのようなこともご相談申し上げましたが、表面には巧者らしいところはお見せにならなかつたが、十分に、申し分なく、ちよつとしたことでも格別になさつたものでした。この世にまた、あれほどの方がありませんか。」

「しとやかでいらつしやる一面、奥深い嗜みのあるところは、又となくいらつしやつたが、あなたこそは、そうはいつても、紫の縁で、たいして違つていらつしやらないようですが、少しこつるさいところがあつて、利発さの勝つてゐるのが、困りますね。」

前齋院のご性質は、また格別に見えます。心寂しい時に、何か用事がなくても便りをしあつて、自分も氣を使わずにはいられないお方は、ただこのお一方だけが、世にお残りでしょうか。」

とおつしやる。

「尚侍は、利発で奥ゆかしいところは、どなたよりも優れていらつしやるでしょう。軽率な方面などは、無縁なお方でいらしたのに、不思議なことだ

したね」

とおつしやるよ」

「そうですね。優美で器量のよい女性の例としては、やはり引き合いに出さなければならぬ方ですね。そう思うと、お気の毒で悔やまれることが多いのですね。まして、浮気っぽい好色な人が、年をとるにつれて、どんなにか後悔されることが多いことでしょう。誰よりもはるかにおとなしい、と思つていましたわたくしでさえですから」

などと、お口になさつて、尚侍の君の御事にも、涙を少しはお落としなつた。

「あの、人数にも入らないほどさげすんでいらつしやる山里の女は、身分にはやや過ぎて、物の道理をわきまえているようですが、他の人とは同列に扱えない人ですから、氣位を高くもつてゐるのも、見ないようにしております。お話にもならない身分の人はまだ知りません。人というものは、すぐれた人というのはめつたにいないものですね。」

東の院に寂しく暮らしている人の氣立ては、昔に変わらず可憐なものがあつた。あのよつに、はたてもできないものですが。その方面につけての氣立てのよさで、世話するようになって以来、同じように夫婦仲を遠慮深げな態度で過ごしてきましたよ。今はもう、互いに別れられそうなく、心からいとしいと思つております」

などと、昔の話や今の話などに夜が更けてゆく。

「第四段 藤壺、源氏の夢枕に立つ」

月がいよいよ澄んで、静かで趣がある。女君、

「氷に閉じこめられた石間の遣水は流れかねているが、空に澄む月の光はとどこおりなく西へ流れて行く」

外の方を御覧になつて、少し姿勢を傾けていらつしやる所、似る者がないほどかわいらしげである。髪具合、顔立ちが、恋い慕い申し上げている方の面影のようにふと思われて、素晴らしいので、少しは他に分けていらつしやつたご寵愛もあらためてお加えになることである。鴛鴦がちよつと鳴いたので、

「何もかも昔のことが恋しく思われる雪の夜に、いつそうしみじみと思ひ出させる鴛鴦の鳴き声であることよ」

お入りになつても、宮のことを思いながらお寝みになつてゐると、夢ともなくかすかにお姿を拝するが、たいそうお怨みになつていらつしやる様子で、

「漏らさないとおつしやつたが、つらい噂は隠れなかつたので、恥ずかしく、苦しい目に遭うにつけ、つらい」

とおつしやる。お返事を申し上げるとお思ひになつた時、ものに襲われるような氣がして、女君が、「これは、どうなさいました、このように」

とおつしやつたのに、目が覚めて、ひどく残念で、胸の置きどころもなく騒ぐので、じつと抑えて、涙までも流していたのであつた。今もお、ひどくお濡らし加えになつていらつしやる。

女君が、どうしたことかとお思ひになるので、身じろぎもしないで横になつていらつしやつた。

「安らかに眠られずと寢覚めた寂しい冬の夜に、見た夢の短かつたことよ」

「第五段 源氏、藤壺を供養す」

かえつて心満たされず、悲しくお思ひになつて、早くお起きになつて、それとは言わず、所々の寺々に御誦經などをおさせになる。

「苦しい目にお遭ひになつてゐると、お怨みになつたが、きつとそのようにお恨みになつてのことなのだろう。勤行をなさり、さまざまに罪障を軽くなさつたご様子でありながら、自分との一件で、この世の罪障をおすすぎになれなかつたのだろう」

と、ものの道理を深くおたどりになると、ひどく悲しくて、

「どのような方法をしてでも、誰も知る人のいない冥界にいらつしやるのを、お見舞い申し上げて、その罪にも代わつて差し上げたい」

などと、つくづくとお思ひになる。

「あのお方のために、特別に何かの法要をなさるのは、世間の人が不審に思ひ申そう。主上におかれても、良心の呵責にお悟りになるかもしれない」

「と、気がねなさるので、阿弥陀仏を心に浮かべてお念じ申し上げなさる。同じ蓮の上に」と思いつつ、

「亡くなった方を恋慕う心にまかせてお尋ねしても、その姿も見えない三途の川のほとりで迷うことであるうか」

とお思いになるのは、つらい思いであったか。